

府立藤井寺支援学校



テーマ:「主体的・対話的で深い学び」「観点別学習状況の評価」

概要

全体会(オンデマンド)で、学習指導要領を踏まえた重度重複障がいのある子どもの教科指導のポイントなどについて確認しました。研究授業は、中学部生徒5名(自立活動を主とする教育課程)を対象とし、国語科(みるきく)の授業を行いました。研究協議では、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を見取る方法や観点別学習状況の評価方法について考え、「活動分析表」を用いて、生徒の学習を評価する方法を共有し、指導方法等の改善につなげるよう提案しました。

実施スケジュール

Research

6月19日(月) 打合せ

Vision

9月25日(月)～
10月6日(金) 全体会(オンデマンド配信)

Plan

11月～ 学習指導案の作成・検討

Do

12月21日(木) 事前授業・授業後の協議
1月19日(金) 研究授業

Check & Act

2月14日(水) 研究協議
3月12日(火)～ 振り返り(オンデマンド配信)

全体会

【オンデマンド配信】9月25日(月)～10月6日(金)

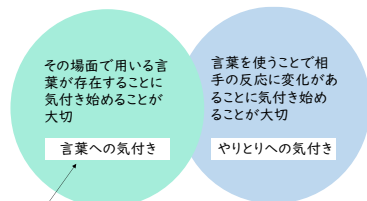
「学習指導要領と重度重複障がいのある子どもの教科指導のポイントなどについて」

支援教育推進室指導主事より(以下資料より抜粋)

学習指導要領のポイントでは、「育成すべき資質・能力」、「主体的・対話的で深い学びの実現」について講義しました。学習指導要領に基づき、めざすべき子どもの姿を明確にして教育活動を行うことの重要性を共有しました。また、「国語」「算数」(小学部1段階)等の教科を例に、1段階における児童・生徒の姿、指導内容のポイント、目標と内容等について説明をしました。

国語(小学部1段階)における児童・生徒の姿

身近な人や興味や関心のある物事との関わりを繰り返しながら

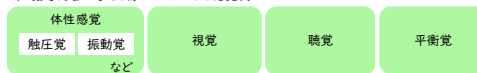


言語的コミュニケーションが難しく、反応が微かな子どもの指導においてポイントとなる内容

国語・算数の指導内容を考える上でのポイント

注意を向けること
気付くこと 「視覚」だけでなく、「触覚」をはじめとする諸感覚を使うことで注意を向けたり、気付いたりできるように指導内容を工夫する。

◇ 指導内容を考える際にヒントとなる感覚例



例えば

固い・柔らかい
振動する・しない

例えば

様々な人の声
大きさ、リズム

- 好きな柔らかさのボールに触れようとする。
- 振動するボールを使って「ある」「ない」に気付く。
- 身近な人(家族、先生、友達)のあいさつの言葉に気付く。
- 様々なリズムの言葉に気付く。

様々な感覚を通して気付くことができるよう活動の幅を広げる

研究授業

学年・教科： 中学部 AIグループ
 単元名： 「せんせい もういっかい」(国語科)

本単元は、『おとうさんもういっかい ゆうえんち』の絵本を題材にして、生徒の言葉への興味を高めることと、前庭覚に刺激を与える楽しい遊びを通して、生徒たちに「もっとしたい」という思いを喚起させ、自分の思いや要求を他者に表出することを目標にしました。小学部1段階の目標設定グループでは、身近な人との関わりの中で、言葉が存在することや、言葉によって相手の反応に変化があることに気づくように働きかけを行いました。

研究協議のポイント
 学習評価では、聴覚・視覚等の諸感覚について、どこまで感覚別にみとれていたか、どのように客観性をもって評価を行うかについて議論しました。そのような課題を解決する方法として、子どもの活動を分析する評価表の作成を提案し、作成を試みていただきました。

成果

「活動分析表」を活用することで、授業の担当者間で、授業のねらいや児童生徒の実態を把握する観点を統一することができたり、児童生徒の反応を客観的に記録したりすることができるといったメリットが明らかになりました。

また、中学部で行ってきたパッケージ研修支援を動画にまとめ、全校の教員に見ていただくことで、今後、授業においては、「身に付けさせたい力について教員間で共通認識をもつこと」、「共通した指標をもって評価すること」などを意識して実践するように共通理解を図りました。

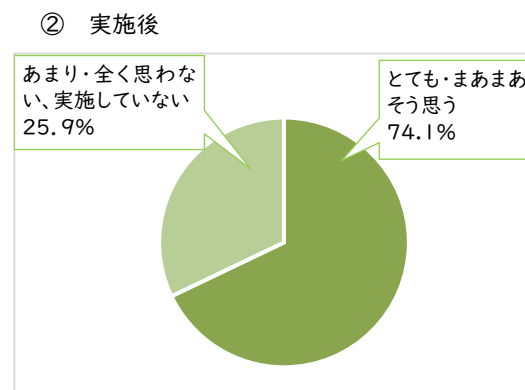
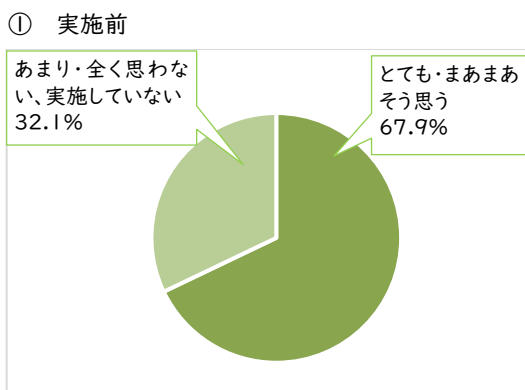
活動分析の手順

①学習活動を設定する。
 ②学習活動に対して、スモールステップの具体的な評価規準を設定する。
 ③項目ごとに、子どもの活動の様子を観察し、評価する。
 ④あらかじめ、評価の段階を定めておく。(パーセント表示も可)
 ⑤観察した子どもの様子を、授業担当者で情報交換する。

評価の方法について

活動分析表を作成し、集約することで次のようなメリットがあります。
 ①活動分析表の項目を作成することにより、授業のねらいが共有できる。
 ②授業の担当者間で、子どもの実態を把握する観点が統一できる。
 ③子どもの反応をしっかりとらえることができる。(児童生徒の成長してきた部分や変化の少ない部分などを明らかにできる。)
 ④子どもの変化を客観的に記録することができる。

アンケート結果



(感想やご意見より)

・今まで、指導案だけでは、授業の中で見ていただきたい観点について、共有しきれいていないと感じることがありました。その点について具体的に共有できるので、「活動分析表」は有効な手立てだと感じました。また、このようなツールがあると、普段、授業に入っていない教員が授業に入った際に、どのような観点で見ればよいのかが分かるのではないかと考えます。中学部は、授業の主导者が評価を書きますが、授業の中で、生徒一人ひとりの反応をすべて見取ることが難しいときもあります。そのため、TTの教員が、共通の観点で、毎回生徒の様子の記録をとることで、授業の中での生徒の変化をとらえることができると思います。また、課題の妥当性について検討する際の資料としても活用できると考えられ、授業改善にも役立たせることができるのではないかと感じました。